「風と雲と魂と」

―シベリア鉄道の晶子―

作・高谷　信之

人物

風
僕
晶子
志よう（晶子の幼少）
つね
婆やうた
山川登美子
林　滝野
女１
女２
河本すみ
増田雅子
僕の母
館野すず
お葉
沙羅

雲
男（阿部精二）
宋七
熊七
河合鉄南
与謝野鉄幹
男１
男２
男３
犬養　毅
粟島狭衣（さきごろも）
頭山　満
大隈重信
内田良平
石川啄木
梅原龍三郎
代筆屋
天の声

プロローグ

闇の中に光の環。一人の女出てくる。

わたくし　シー耳を澄ませてください。わたくしです。

わたくしと言っても誰も分かりません。わたくしは宇宙からやってきました。待ってください。ちょっと待って！分かっています。でもここはお芝居の始まる舞台なので、許してください。

例えわたくしが、宇宙からやって来たと言っても。

そうです。わたくしは宇宙の涯（はて）からやって来た、風です。

わたくしという名の風なんです。（一冊の本を取り出す）

このライアル・ワトソンの著作「風の博物誌」にはこう書いてあります。ＷＡＴＡＫＵＳＨＩ、日本の局地風の一種、わたくしと。

風に形はあるでしょうか？ 緑の葉のそよぎ、青い波と白い波頭、雲の移動、其処に風を感じ、風を見ます。

でも風に心はあるのでしょうか？ 風はわたくしです。

わたくしの感覚でその心を読み取ります。

ですから、これから始まることを感覚で受け止めてください。

わたくしからあなたへのお願いです。

いつの間にかもう一人？ がいた。

雲　風邪だって インフルエンザか？

風　ちげえよ。

雲　違う？ 違う方の風だ？

風　そう風。

雲　わたくしだって、気取るんじゃねえ、こちとら雲だ。

風　クモ、いやぁねえ。軒下に網を張る蜘蛛。

雲　違うだろう？

風　じゃあ雲助？

雲　雲助？ おい、おめえ、若いくせに若い奴の知らねえ言葉言うなよ。（突然歌いだす）

〜 頭を雲の上にだし、四方の山を見下して、雷様を下にして、富士は日本一の山・・・・

風　ほら〜、それ雲じゃなくて、富士山の歌じゃない？

雲　えっ？ そうか・・・・

少年が現れる。

僕　僕です。風でもない、雲でもない僕という塊（かたまり）です。塊は魂（たましい）とちょっと違います。何が？ 字が一寸。こう土の隣に鬼と書きます。

鬼という字と鬼のそれらしい画がスクリーンに出てくる。

僕　だから、塊と魂は似てるんです。親戚かな？いや、
　親戚は今あんまり親しくないな。友達・・・・

雲　おい、小僧、大人の時間だぞ！

僕　あっ、いじめ、パワハラ！記者会見するぞ。

雲　何？ちょっとまて、記者会見で何もかも年寄りの全てを潰すな！

風　やめたら。ちょと古いんじゃないの。

雲　古い。その言葉しみるんだよなー。

僕　おじさん鬼？

雲　鬼じゃないよ。雨の下に云(うん)がついて雲だ。魂の親戚だ。ほら空にぽっかり湧くだろう。あの雲だよ。

僕　じゃあ、始めよう。「風と雲と塊」がそろったから。

雲　「風と雲と塊と」？

風　――シベリア鉄道の晶子　――

雲　おい、待て、違うんじゃないか、おい、ちょっと違う・・・
　魂と塊間違えるな！

僕　出てこい！シベリア鉄道！

音楽 ――

蒸気機関車の汽笛と共にシベリア鉄道がスクリーン上に走り出す。

シベリア鉄道の車内。座席が４席台上に。後はフラットな舞台。

第一場

一人の女、与謝野晶子（３４歳）、汽車の座席に座っている。

車窓から見えるのは荒涼とした白樺の林に、まだ解けていない雪。

「明治４５年5月・シベリア鉄道」の文字、スクリーンに出る。

ウラジオストックからロシアの大地を行く蒸気機関車。５月とはいえ、

未だ雪積もる荒涼たる白樺林の原野を汽車は走っている。

晶子　魂は何処にいる。魂は塊？ 何故、何のためにと 見えざる魂に

繰り返し問う。

天を駆け、風を切り裂いて、雲を追い。なぜわたしはこんな異

国の列車に乗って揺れているのか？

七人の子どもを置き去りにして。そう、わたしはついに狂った。

胸に燃ゆる吾が火を抱き、いずくへ？

西へ、あなたに逢いに、あの西の涯の巴里へ。

若い男が通路から現れ、晶子の座席の前に立ちふさがる。

男　あのう？

晶子　何か？

男　ああ、よかった、日本人の方ですよね。

晶子　日本語でしゃべっていますから。

男　座っていいですか？ ここ（と晶子と向かい側の席をさす）

晶子　暫くならかまいませんが、指定席じゃありませんこと。

男　それなんですよ。（構わず座る）

晶子　えっ？

男　僕、高いところ苦手でして。

晶子　それが何か？

男　ここ二段ベットですよね。

晶子　ええ。

男　まさか、上の段だとはね。ロシア語ですから切符を買う時は、分かりません。

晶子　そうですね。

男　どちらまで？

晶子　云わなければいけません？

男　いや、失礼しました。私名乗るのを忘れていました。こういう物です。（卜名刺を出して晶子に渡す）

晶子　私は・・・・名乗らなければいけませんか？

男　いや、受け取って頂くだけでいいんです。お嬢様。
晶子　お嬢様ではありません。
男　はっ？
晶子　結婚しておりますので。
男　あゝ奥様ですね。
晶子　ええ、まあ。あなた若いのにずうずうしいのね。
男　そうですか？で、奥様は何の目的でこのシベリア鉄道にお乗りになったんですか？
晶子　堺です。大阪の。
男　はっ？
晶子　出身です。多分あなたが次にお聞きになるだろうと思って。
男　堺。いいとこですよね。
晶子　いらっしゃったことがありますの？
男　いいえ、一度も。お茶ですか。
晶子　お茶は生産しておりません。
男　だからその、千の利休とか… そうだ秀吉の時代に栄えた商業の町でしょ。
晶子　そうです。ですが面白く有りません。
男　何が？
晶子　あなたのお話が。
男　わかりました。実は私・・・・

晶子　なんですの？

男　詐欺師なんです。

晶子　もうけっこうです。

男　えっ？

晶子　無理におつくりになったお話は。

男　いいえ、そんな。

晶子　普通詐欺師は最後まで、そんなことは言いません。

男　その通りです。

晶子　それでは一体私から何を盗るの？ 私はお金、持っていませんことよ。御存じかどうか知りませんが、ここ毎日、ひとかけらのパンとロシアンティー一杯しか喉に通しておりません。

男　それでは、食堂車で何かご馳走しましょう。

晶子　わたしもそれほどの馬鹿では 有りません。詐欺と言われた方から何を驕っていただくのですか？

男　なるほど、わかりました。駆け引き無しに、あなたを盗んでみましょう。あなたの中に住む鬼を 。

晶子　鬼？

暗転

第二場

風（わたくし）　時、明治二十三年　１８９０年 この年第一回総選挙が行われ、第一回通常議会が開催されました。伊藤博文が初代の首相になった年です。難しい？

では、これはどうかな？ ８月２１日警視庁が男女混合の演劇を、初めて不問に伏すと定めた年でもあります。

成るほど、警視庁が不問に付すところから日本の演劇は始ったんですねえ。警視庁あっての演劇。

えー、本筋に行きます。所、大阪、堺、駿河屋、和菓子屋の居間。鳳志よう後の晶子、　まだ十二歳でした。

鶯の鳴き声が聞こえる。春先。

志よう、手鏡を手に筆で口紅を塗っている。ややあって母つね（四十歳）がやってくる。

つね　　これ、志よう何しとるんですか？

志よう　　見れば分かるでしょう。

つね　　いけません。お化粧なんか。

志よう　　何があかんの？

つね　　あんたには早い。

志よう　うちかてもう十二歳やし。

つね　そやから――

志よう　なんやの？

つね　わての口から言うのもなんやけど、この堺の町はそれでなくとも柄の良くない処や。

志よう　それで？

つね　お化粧して、変な男にねらわれたりしたら、どないすんの。

志よう　ただ、してみただけや。

つね　他にぎょうさん勉強することがあるでしょ。

志よう　もう、あきたわ。帳簿つけたり、そろばんはじいたり、うんざりやわ。

つね　何言うてるのこの子は。和菓子の名家、駿河屋の娘がしゃんとしなさい。

志よう　そやかて、輝姉ちゃんも、花子姉ちゃんかて、お化粧してますがな。

つね　お姉ちゃんたちとあんたとは違います。

志よう　なにそれ？ あの二人がお母ちゃんのお腹から生まれた子でないからやの。

つね　しー、聞こえたらどないすんの。

志よう　お母ちゃん、一度聞きたい思ってたんやけど。

つね　云うてみなさい。何？

志よう　なんでうちだけ男の子みたいな服を着せられとるの？何で？

つね　それは・・・・

志よう　うち、聞いてしもうたんや、番頭の熊七から。

つね　何を！あんた何を聞いたの？

宋七（志ようの父、３２歳くらい）酔って番頭の熊七に抱えられ出てくる。

熊七　二代目、どないしましたん。もう、こないに酔うてから。

宗七　うるさい。お前にわしの気持ちなんか分かるか！

熊七　へい、わからしません。わしら下賤の者には。ですが、わても人の親ですからそれは人並みには。

宗七　何を言うてけつかる。

熊七　めでたいことやありませんか？

宋七　何がめでたいんじゃ。なんでや。何で女子（おなご）なんや。

熊七　そないなこと言うたらあきまへん。奥様のつねさんにとっては、二代目との初めてのお子やありまへんの。

宗七　そやさかい、男の子が欲しいいうわての気持ちが 熊七、お前分からんか。

熊七　そないなことわかりますがな。そやけど、いとはんが生まれたこんなおめでたい日に　なれない酒をがぶ飲みしてから悪酔

いして、どないなってますねん。二代目。

宗七　おい。二代目言う言い方は止めえ。

熊七　なんですの急に。

宗七　確かにわしは二代目宗七や。そやけど、わしは初代の宗七やと思ってやっとる。この駿河屋の伝統を守っとるがな。

熊七　そら、分かってます。

宗七　そやったら、二代目いう呼び方は止めえ。旦那はんとか、せめて宗七さんと呼べ！

熊七　分かりました。わかりましたから、大声で叫ぶのは止めてください、二代、やなかった。旦那はん。

まあ、しかし．どんだけ気弱いのか、やさしいんか。大酒飲まんと、言えへんのかいな、二代目と呼ぶの止めろいうくらいのこと。

宗七　何？なにかいうたか？

熊七　いいえ、何も言いしません。旦那はん。

二人は消える。再び、つねと志よう。

つね　熊七がそんなことを。

志よう　もう、昔の事やから、いとはんが、お生まれになった日の事お教えしますって。

つね　余計な事を。

志よう　悪かったなお母ちゃん。

つね　なんやの。

志よう　うち、男の子やのうて、悪かったなー。

つね　そんな、何を言うてるの志よう。お母ちゃんいっぺんかて そないな風に思った事 あらしまへん。

志よう　鬼や・・・・

つね　なんやて？

志よう　私の中に鬼が住んでしもうた。

つね　志よう。あんたね。

志よう　何？

つね　本の読み過ぎや。

志よう　何を言うてるの？ 本だけが、わてのなぐさみやないの。そやのに、そやのに・・・・　（泣き出す）

つね　分かった。（志ようを抱いて）わかったさかい、泣かんでええ。好きなだけ本読んだらええ。

志よう　（母の腕を振りほどき）嫌いや！お母ちゃんなんか嫌いや！（ト去る）

つね　志よう！（呆然と立ちすくむ）

暗転

第三場

汽笛の音、または列車の音蘇って、再びシベリア鉄道の座席。

男　成程。その頃どんな本を読んだんですか？

晶子　「論語」や「長恨歌（ちょうごんか）」「源氏物語」なんかです。

男　「長恨歌」？あの白楽天の？

晶子　お読みになりました？

男　めっそうもない。聞いたことがあるだけです。

晶子　玄宗皇帝が絶世の美女楊貴妃への思いを込めた歌ですな。

男　よくごぞんじですのね。あなた誰ですか？

晶子　僕は、単なる詐欺師です。

男　単なる？

晶子　で、いくつでとおっしゃいましたか？

男　八つくらいから、漢学塾に通っていましたから。

晶子　いやはや只者ではないな。あなたこそ誰ですか？

男　歌人です。

晶子　カジン？家の人と書いて、奥様。いやあ、ただの家人ではないな。

男　歌の方の歌人です。

晶子　あゝ、そちらの。柔肌の熱き血汐にふれも見で、さびしからず

や、道を説く君。

晶子　私の歌です。

男　えっ？

晶子　その歌は、私が作った歌です。

男　じゃあ、あの「みだれ髪」の　。与謝野・・・・

晶子　与謝野晶子です。

男　それはそれは、こんな地の果ての列車の中で。いや光栄です。

晶子　あなたは？

男　わたしは・・・未来から来ました。

晶子　又そんなことを？

男　やっぱり詐欺師にしておいてください。

晶子　怪しい方とは話さないようにと。これは母の教えです。

男　それほど、親の言いつけを守るようには思えませんがね。

晶子　なぜですの？そんな風に見えます？

男　駄目ですね。すぐこちらの誘導尋問にかかってしまう。

晶子　まあ、なんというおっしゃりよう。

男　それにしても、シベリア鉄道でロシアの取材か何かで？

晶子　知りません。知っててもも申しません。

男　取材でないとすると、個人的な旅ですな。

晶子　もう、ご自分の席にお戻りになったら。

男　長いですよ、先は。人間を堕落させるのは、空腹よりも退屈で

す。空腹は何かのバネにはなるが、退屈は死を呼びこむ。

晶子　お説教は沢山です。

男　いや、受け売りではありません。自分の体験から 言っています。

晶子　何であろうと、私を一人にさせてください。わたしは歌を造ります。はっきり言ってあなたは邪魔です。

男　あゝ、わかりました。それではまた。

晶子　もう結構です。

男去る。憮然として、和綴じの用紙を取り出す 晶子。筆をとりだして何か書こうとするが落ち着かない。

第四場

鉄道唱歌聞こえる。回想 夏、与謝野鉄幹 と河合鉄南

風　鉄道唱歌です。明治三十三年１９００年、東海道線はとっくに走っていて、この年鉄道の歌が後から出来上がったのです。東京から神戸への寝台列車が初めて登場した年でもあります。

八月四日　河合鉄南２６歳は、大阪北浜に逗留している友人、与謝野鉄幹に晶子を引き合わせました。晶子２２歳 鉄幹は２８歳でした。

晶子と乳母うた（８０歳）やってくる。

乳母うた　いとはん。もっとゆっくり歩いてください。わし息切れが
して・・・・
晶子　ばあや、早く。日が暮れてしまうわ。
うた　それは日も暮れますわ。いとはんが、我儘をおっしゃるからで
す。お母様の言うとおり、何も与謝野鉄幹さんとやらに今日無
理やり会わいでも ええんちゃいますの。
晶子　今日を逃がしたら、中々お会いできないの！
うた　そやからいうて、何も若いおなごがこんな夕暮に。
晶子　もう、黙って。遅くなったのはお母様の所為でしょ。早く。お
いてゆくわよ、うた。
うた　はいはい、どうせあたしは乳母のうたでございます。わがまま
いとはんが、わての言う事等 聞いてくだはらへん事はじゅう
じゅう承知しておりますがな。
晶子　黙ってったら！

河合鉄南がやってくる。

河合　あゝ晶子さん。こっちです。
晶子（大声を出したことに照れて）あゝ鉄南さん。すみません。
うた　これはこれは河合鉄南さん。うちのいとはんがいつもお世話に

なっております。

晶子　（小声でたしなめて）あいさつはいいから。

うた　（これも小声で）付き添いが居てることを伝えるのが大切でしょうが！

河合　うたさん。わざわざつきそいすみません。わたしがお迎えに行くべきだったのに。

晶子　いいえ、そんな。例によって中々母が外出を許してくれませんので。

河合　そうですね。

と案内しようとすると、同時に与謝野鉄幹（２８歳）、やってくる。少し後から山川登美子（２１歳）出てくる。

与謝野鉄幹　これはこれは、あなたが晶子さんですね。

晶子　初めまして。鳳（ほう）晶子でございます。

鉄幹　「明星」主幹の与謝野鉄幹です。　貴女が明星に投稿した歌は　すばらしい。〜　しろすみれ、桜がさねか紅梅か、何につつみて君に送らむ　でしたかな。

晶子　ありがとうございます。先生に空んじていただくなんて、幸せです。

鉄幹　紹介しよう。こちらが山川登美子さん。御存じかな、やはり明

星の同人です。

登美子　はじめまして。山川登美子と申します。お会いしとうございました。

晶子　あゝあの山川さん。鳳晶子です。わたしこそお会いしたいと。

登美子　お姉さまとおよびしてもいいかしら。

晶子　でも、そんなに歳は違わないのでは？　わたしは２２歳です。

登美子　いいえ、一つ年上でも私の中ではお姉さまです。嫌ですか？

晶子　嫌ではありませんが、歌の世界では何も知りませんのよ。

登美子　わたくしも同じです。そんなことは構いませんでしょ。

ねえ、先生。

鉄幹　年とか家柄とかは関係ありません。恋です。

晶子　恋ですの？

鉄幹　そう、恋です。女性の歌人は恋をしなければなりません。それも深い恋です。恋の淵から生まれる歌こそ、浪漫主義の歌を輝かせます。ただ。

晶子　ただ？

登美子　浅い恋はだめですのよね先生。

鉄幹　浅はかな恋はいいのです。恋には過ちも、愚かな恋もありますから。でも浅い恋はいかん。

晶子　浅い恋とはどんな・・・・

鉄幹　そういえば、晶子さんは河合君に大変お熱を上げていたと聞く

が。

晶子　いいえ、そんなことはありません。

河合　いやその浅い恋とかそういう・・・・

晶子　本当に、これっぽっちも、そんなことはありません！

河合　これっぽっちも？

鉄幹　やけに強調するねー。まあ、どうでもいいが。

晶子　どうでもよくはありません。恋は命がけですから。

鉄幹　恋は命がけ。

晶子　そう思います。恋は魂のほむらではないかと。

登美子　まあ、素敵。その通りですわ。

鉄幹　なるほど、君たちはそろいもそろって、自然主義には似合わない考え方の歌人だ。正に浪漫主義の輝ける未来にふさわしい。

うた　さっぱりわかりまへん。

晶子　うた。あゝすみません。乳母のうたです。

鉄幹　あゝこれはご苦労様です。

うた　お嬢様がお世話になります。早速ですが、もう日も暮れますので、そろそろ堺へ帰らねば。

晶子　あゝご苦労様うた。それでは帰って。

うた　何をおっしゃいます。堺の駿河屋の御自宅へお嬢様を送り届ける迄が私の仕事でございます。

晶子　今日はもういいから。

うた　いいからって、何がいいんですの？　わたし途中でお仕事放棄は出来ませんよ。

晶子　もういいの。

河合　うたさん。今日の処は私に任せて。

うた　いいえ、いくらお嬢様の憧れの河合先生でも、お任せできません。　私は知り尽くしております。紳士が夜も紳士であることはほとんどありませんから。

鉄幹　うたさん。それは体験からですか？

うた　体験・・ではありませんがその、世の定めです。

河合　しょうがないな、これから歌会が始まるんですよ。

うた　せやったらこういたしましょう。私は歌会のお座敷の縁側でもどこでも待ちますので、終わり次第、御嬢さんと一緒に堺へ帰らせていただきます。

鉄幹　ではうたさん。そうしましょう。少し遅くなるが、其処はあなたの器量で、うまく親御さんに伝えてください。

うた　器量？　器量は私よくありませんが、それが何か？

一同に笑い。

鉄幹　うたさん。あなた面白い人だね。

河合　うたさん。それでは、私が控えの間に案内しましょう。どうぞ。

うた　そうですか、それやったら暫くそちらで控えさせていただきます。

河合　さあ、どうぞ、こちらです。

二人行ってしまう。

鉄幹　晶子さんも大変ですね。乳母日傘（おんばひがさ）で。

晶子　いいえ、そんな。私はただの和菓子屋の娘です。母がとくに外出とか、殿方と会う事に厳しくて。

鉄幹　そうだ、私は以前堺の町に行った時、駿河屋さんに寄ったことがありましたよ。帳場の片隅におさげ髪で座っていた可愛い御嬢さんの姿が記憶に残っている。そうか、あれがあなたですね。

晶子　いいえ、あれは多分姉・・・・

鉄幹　いやそうか、わたしとしたことが、こんなことを忘れているなんて。

登美子　きっと晶子お姉さまが、あまりに可愛すぎて記憶の底に閉じ込めたのではありませんこと。（ト言いながら鉄　幹の袖をそっと握る）

鉄幹　いいですか?、歌の道は、中々普通の方には理解できない世界です。才能が全てと言ってもいい。

登美子　才能が全てですの。

鉄幹　もちろん才能も磨かなければ、次第に腐ってしまいます。

晶子　命がけでも腐るのは嫌です。

登美子　私はお姉さまと違って腐ってもいいわ。朽ちて、腐り果てるのなら、望むところです。

鉄幹　なるほど、二人とも対照的だ。君たち二人は才能が有ります。その才能を旨く育ててほしい。いや、それを育てるのは私の役目かも知れません。

登美子　先生、わたしと晶子姉さまの才能はどう違うのですか？

鉄幹　そう、例えれば登美子さんは白百合。晶子さんは白萩かな。

晶子　白萩とはどういう意味ですの？

鉄幹　（意味深に微笑み）今に分かりますよ。あせらない。あせらない。

登美子　わたし白百合は好き。

鉄幹　そうかよかった。晶子さんも白萩を好きになってください。

晶子　わたくし、死んでもいい。

鉄幹　えっ？

晶子　鉄寛先生に会えたのですから、ここで死んでもいいと思います。

鉄幹　これは驚いた。勿論それは嬉しいけれど、私達に何か歌が始まるとしたら、これからなのですから、死んでしまっては・・・・

登美子　私は生きるわ。先生と一緒に。お姉さまお死になるなら、どうぞご自由に。

晶子　まあ、登美子さん。随分と冷たいのね。

登美子　だって、お姉さまがご自分で言いだしたのですよ。

晶子　（むきになって）例えです。嬉しさの例えなの！

鉄幹　まあ、まあ、会った草々喧嘩はいけません。

登美子　喧嘩ではありません。ほんのご挨拶よ。

晶子　そう。その通りです。

戻ってきて近くで聞いていた河合。

河合　さあ、皆さん。歌会が始まりますよ。

鉄幹　あゝ、そうだ。今日の歌会は楽しくなりそうだね。河合君。

河合　はい。そうですね。（ト何やら浮かない）

登美子　参りましょう。お姉さま。

晶子　はい。

一同は会場の座敷の方へ去る。灯溶暗。

第五場

光の輪の中、風　現れる。

風

これが晶子と与謝野鉄幹との運命の出会いでした。また山川登美子との 出会いでもあったのです。

さて、この頃の日本はどんな具合だったのでしょう。

１８９５年　日清戦争に勝利した日本は、中国の遼東半島の領有権を獲得し、更に台湾を初の植民地として獲得したのです。政府を初め軍部は更に中国大陸への野望を推し進めるべく、暗躍していたのがこの時期なのです。

この頃歌の世界とは全く違う世界、政界に一人の青年がいました。名を阿部精二といい、衆議院議員犬養毅の秘書をしていました。

阿部　分かりません。

犬養毅　分からんか？ もう一度よく考えてみよ。大陸に我々が今 侵出するために何が必要か？

阿部　武器ですか？

犬養毅　もちろん攻め込むことになれば武器はいる。それ以前に必要かつなくてはならぬものがあるだろう。

阿部　なくてはならぬ・・・・

犬養毅　阿部、お前何年になる。

阿部　はっ？

犬養毅　岡山の田舎から風呂敷一つで、何の縁故もなくこの犬養 毅（いぬかいつよし）を訪ねてきて、書生にしてくれと5日間も玄関先に居座ってあれ

から何年だ。

阿部　六年と三カ月になります。

犬養毅　いいか、阿部、政治とは先を読み、常に先に己が何をすべきかを考える事だ。

阿部　怖れながらわたくしには・・・分かりません

犬養毅　なんだ。

阿部　政治家を目指してはいません。というより、そんな器量を持ち合わせていません。

犬養毅　だったら何になりたい。

阿部　ただ、偉大な犬養先生から人間としての生き方を学び、何かその・・・・

犬養毅　なんだ？

阿部　分かりません。

犬養毅　道暮れて先に光が見えないか。若いから許される。

阿部、人生はそんなに長くはないぞ。

阿部　はい。

犬養毅　地図だ。

阿部　はあ？

犬養毅　かの大陸に何かを仕掛けるために、真っ先に必要なのは精密な地図だ。

阿部　はあ、地図・・・

犬養毅　まあ、お前にはまだわからんだろう。分からんでいい。

だが。

阿部　はい。

犬養毅　その上で、お前にやってもらいたいことがある。

阿部　なんなりと。

犬養毅　大陸に渡り、精密な地図を作ってもらいたい。

阿部　私が地図を。

犬養毅　そうだ。

阿部　しかしどうやって？

犬養毅　少しは考えろ。地図はどうやって作る。馬賊や地元の農民に深くかかわり、聞き出すことから始める。

阿部　はい。

犬養毅　そして測量だ。お前伊能忠敬を知っているか？

阿部　存じています。

犬養毅　お前が満州の伊能忠敬になるのだ。

阿部　私が伊能忠敬に。成れるでしょうか。

犬養毅　なれるでしょうかではない。成ると断言するのだ。自分自身にたいして。それなくて何がなせる。何もなせない。

阿部　はい。

犬養毅　しかしいいか何事もその前に、なにがしかの修行期間が必要だ。

阿部　修行期間。

犬養毅　まず、物おじせず、出会いがしらの人間としっかり会話をして親しくなること。そして未知の処に対して臆せず踏み分け進むこと。勇気を持って。出来るか阿部。

阿部　はい。やって見ます。

犬養毅　違う。やってみますではなく　やりますだ！

阿部　やります。

犬養毅　まず一人で一年間　旅に出よ。修行の旅だ。

阿部　はい、わかりました。

暗転

第六場

河合鉄南と晶子、やや距離を置いて立っている。

河合　〜　幾万の屍埋めし、塚の上を都と呼びて、人の住まえる。

晶子　〜　やは肌のあつき血汐に触れも見で、さびしからずや道を説く君。

二人の歌、スクリーンに出る。

河合　晶子さん。何故なんだ。

晶子　言えません。

河合　あんな歌を造ってあなたは私に送ってくれたのに。

晶子　すみません。変わるんです。

河合　変わる？

晶子　時と共に人の気持ちは変わるんです。

河合　だとしても、私には何故という問いが残ってしまう。

晶子　あえていうなら、貴方は僧侶ですから。

河合　僧侶？　僧侶が恋をしてはいけないわけはない。

晶子　いいえ、貴方は仏の道に精進なさり、私の事はお忘れになってください。

河合　何故だ！

晶子　あなたには残酷な事を申し上げます。

河合　言ってください。その方がいっそすっきりする。

晶子　他に好きな方が出来たからです。

河合　察しはつきます。でも、何故？

晶子　幼かったのです。もっと別の時に巡り合えば・・・

河合　そんな・・・

晶子　ごめんなさい。（頭を下げる）

河合　謝らないでください。謝られれば、こちらがみじめになる。

あなたを忘れる、忘れ方を教えてください。

晶子　あなたはいい人よ。さようなら。

晶子上手に去り。河合立ち尽くす。

入れ替わりに登美子出てくる。

鉄幹下手に出てくる。

登美子　〜、君よ手を、当てても見ませこの胸に、くしき響きのあるはなんなる。

鉄幹　霊の琴か、恋の小鼓か、詩の笛にも思えます。このたびの傑作はこの一首につきます。

登美子　うれしいわ、先生に褒められると登美子本当に嬉しい。

鉄幹　もう、先生と呼ぶのは止めなさい。

登美子　なんとお呼びすればいいのですか？

鉄幹　もうわたしたちは先生と弟子という間柄ではなくなったのですから。

登美子　そうですね。鉄幹と呼びます。

鉄幹　いいや、寛でいい。

登美子　では寛、ご相談があります。

鉄幹　なんなりと。

登美子　わたし結婚しようと思います。

鉄幹　えっ？

登美子　びっくりした？ 何を驚いているの。だってあなたには奥様がいらっしゃるじゃないの。滝野という奥様が。

鉄幹　しかしそれにしても急に・・・・

登美子　急にではありません。以前から父に進められていた縁談なのです。

鉄幹　あゝそういう・・・・

登美子　福井小浜の、遠縁の者です。

鉄幹　君はその方を・・・・

登美子　愛してはいません。愛しているのは寛、あなただけです。

鉄幹　ありがとう。しかし。

登美子　でも家の因習に従わなければならないのです。わたしはそういう女です。いえ、そういう家の女なのです。

鉄幹　それはすぐなのかい。

登美子　すぐです。年が明けたらおそらくすぐ。

鉄幹　さびしくなるね。

登美子　でも歌は止めません。

鉄幹　そうか、それは是非とも。さあ、私はそろそろ行かなければならない。

登美子　さようなら。

登美子は去る。ややあって、立ち去る鉄幹。

第七場

下手前、風呂敷を首に巻き、トランクを持って立っている雲。

雲　　さて、暫くです。私雲です。本職は雲なんですよ。
空にぽかっと浮かぶ雲。実体がないじゃないか？
自由に、形を常に変幻自在に変える事の出来る気ままな存在なんです。そんな雲が語るその後の出来事です。
明治３４年１９０１年二十世紀が明けました。
鳳晶子は六月十日なんと堺の家を出て、新橋の駅に降り立ったのです。晶子２３歳の初夏でした。

雲は風呂敷とトランクを佇んでいる晶子に渡す。歩き出す晶子。

雲　　さて、明治３４年六月十日同じ日、渋谷の鉄幹の住まいです。

妻　滝野（２４歳）と鉄幹。

滝野　　萃（あつむ）がひきつけを起こしているのですよ。

鉄幹　だから、田舎に帰って治してやればいいじゃないか。
滝野　無理でしょ。
鉄幹　どうして？　山口の徳山にだっていい医者はいるだろう。
滝野　そういう事じゃあございません。
鉄幹　どういうことなんだ。
滝野　考えてごらんなさい。あんな状態の子供を、何十時間も汽車に乗せられるとお思いですか？
鉄幹　でも、お前は帰ると言ってたじゃないか、一度田舎に帰ってと、ついこないだ。
滝野　それは萃がひきつけを起こす前ですよ。
鉄幹　それにしても、一度口にしたことを。
滝野　何かご都合が悪いのですか？　わたくしがこの家にいては。
鉄幹　都合が悪い等とそんなことはありません。だが・・・・
滝野　だがなんですの？
婆や河本（五十歳くらい、後ろから）ご都合が悪いんですよ。奥様がいらっしゃると。
鉄幹　おい婆や、なにを証拠に。
滝野　やっぱり…
婆や　証拠ですか？　旦那さん証拠をお出ししましょうか？
鉄幹　婆や、今はその・・・・
滝野　今は

婆や　お出しします？

鉄幹　いやその・・・うーん、もういい！

滝野　お怒りになればいいと。

鉄幹　何？

滝野　お怒りになれば何もかも終わるとお思いですのね。

鉄幹　そうじゃない。そうではないが・・・・(泣きそうなくらい追いつめられて)

婆や　旦那様、差し出がましいようですが

鉄幹　なんだ婆や。

婆や　奥様の滝野さんを大切になさいませんと、バチがあたりますよ。

鉄幹　バチはもう十分に受けている。「文壇照魔鏡(ぶんだんしょうまきょう)」事件だけで十分だ。

このシーンより、現実と幻覚に似た空間が交互し、混合したりする。

雲　ちょっと補足させてください。この年3月、「大日本廓清会(だいにっぽんかくせいかい)」という処から「文壇照魔鏡」という怪文書が発行されたのです。

音楽――5人の仮面をつけた男女出てきて鉄幹を囲む。手にはスマホ。

天の声聞こえる。

天の声　鉄幹はいかなるものぞ。

以下の文字、携帯のＬＩＮＥのようにスクリーンにも現れる。

男１　鉄寛は妻を売れり。

男２　鉄幹は処女を狂わせしめたり。

男３　鉄幹は強姦を働けり。

男１　鉄幹は少女を銃殺せんとせり。

女１　鉄幹は強盗放火の大罪を犯せり。

女２　鉄幹は食い逃げに巧妙なり。

男２　鉄幹は詩を売りて詐欺を働けり。

男３　鉄幹は恐喝取材を働けり。

女１　鉄幹は「明星」を舞台として天下の青年を欺罔（ぎもう）せり。

男１　鉄幹は詩の剽窃者たり。

女２　鉄幹は文法を知らず。

男達　鉄幹は師を売る者なり。

女達　鉄幹は友を売るものなり。

仮面の者たち去る。

鉄幹　黙れ！嘘だ。皆嘘だ！

滝野　どうなされました。

婆や　旦那さん大丈夫ですか？

鉄幹　大丈夫ではない！軽々しく大丈夫等というな！

雲　なぜこのような怪文書が出たのか？

鉄幹は前妻、つまり前の妻、生徒であった浅田信子（さだこ）を、教師なのに強引に結婚に持ち込み、やがて捨て、現在の妻、林滝野の実家からは、「明星」発刊の為のそうとうの資金を援助してもらい、また以前働いていた下女サキを犯し、狂わせたとか。日清戦争の折朝鮮に渡り、色々な女に係わる犯罪もどきの事件を起こしていた。等様々な悪い噂がながれていたのです・・・・

鉄幹　嘘だ。何もかもでっち上げだ。弁解の時間をくれ！きちっと説明する。

雲　成るほど弁解・・・・よろしい時間があったら。

鉄幹　なんだと！時間だと？

滝野　分かりました。時間がたって萃（あつむ）が落ち着いたら徳山へ帰ります。

婆や　それがよろしい。そうなさいまし。

鉄幹　分かった。悪いがそうしてくれ。出かけてくる。

滝野　どちらへ？

鉄幹　言ったろう。それは言うな。男が一歩外へ出れば五万の敵がいるのだ。

婆や　お化粧をした敵でないとよろしゅうございますが。

鉄幹　おいすみ！（弱気になって）ばあや、かんべんしてくれ。

婆や　はい、失礼を申しました。

滝野　いってらっしゃいませ。

鉄幹　行ってくる。

鉄幹支度して、滝野、手伝い出ていく　。明かり転換。スクリーンに次の背景映る。

新橋駅ホーム　。

晶子、あちこちとまどいながら、ウロウロとして立ち止まって途方に暮れている。鉄幹やってくる。

鉄幹　あゝ晶子さん。

晶子　先生！

鉄幹　すまん。申し訳ない、待たせてしまって。締切が色々と重なって・・・・

晶子　いらっしゃらないのかと思いました。

鉄幹　そんなわけはないだろう。でも悪かったね。

晶子　いいえ、やっとお会いできたんですね。わたくし家を出て参りました。

鉄幹　あゝやっと本気になってくれたんだ歌作りに。

晶子　勿論です。でもそれ以上に先生のおそばで、色々とお世話

を・・・・

鉄幹　皆まで言わなくていい、嬉しいよ。本当に嬉しい。だが・・・・

晶子　だがなんですの？

鉄幹　ほんの少しだよ。三日か四日　、わたしの家に来るのは後にしてほしい。

晶子　どういう事ですの？

鉄幹　そのう・・・・

晶子　先生、はっきりおっしゃってください。

鉄幹　先日山口にいた滝野が不意に上京して来てね。

晶子　奥様が？

鉄幹　もう帰る予定だったんだが、子供が、萃がひきつけを起こしてしまい・・・

晶子　分かりました。で？

鉄幹　で？

晶子　私はどうすればよろしいのですか？

鉄幹　あゝ、心配ない。わたしの友人、粟島狭衣（さきごろも）君の処に暫く居てほしい。

晶子　暫くっていつまでですの？

鉄幹　いや、すぐだ。すぐに滝野は追い返すから。ね。

晶子　わたくしが、どんな思いで・・・・（涙ぐみそうになるが人の気配を感じて）

男が近づいてくる。粟島狭衣である。先程の仮面をつけたまま。

粟島　粟島狭衣です。鳳晶子さん。どうぞ。（ト手を差し伸べる）

晶子　お世話になります。（晶子、粟島にトランクをわたす。）

晶子　（鉄幹に）必ず、迎えにきてくださいね。

鉄幹　勿論すぐに行くさ。すぐ迎えに。

晶子　もう・・・・

鉄幹　何？

晶子　もう、嘘は止めてくださいね。

鉄幹　嘘？ 嘘などない。

晶子　信じています。

粟島　よろしいですか？ では、参りましょう。

鉄幹　粟島君お願いします。

粟島　はい、おあずかりいたします。よろしいですか？

晶子　はい、まいりましょう。

粟島に誘われて、晶子は歩いて汽車の車内の席に着く。

灯り変わって、再びシベリア鉄道の車内。

光の輪の中に立っている晶子。

第八場

晶子　あの時私の心の涙は、分水嶺（ぶんすいれい）のように二筋に別れた。堺の家と決別して私は魔の都と言われる東京にやって来たのだけれど、受け止めるべきあの人は、まるで波に漂う海藻のように揺れながら、おぼろげに言った「もう少し待ってくれ、君が家に来るのはもう少し」と。私は突如失われた時間の中で、佇んだ。私は何処へ行くのか、行こうとしているのか、いずくに、たゆたって行けばいいの？

〜　身を重ね、抱（いだ）きてもなお交わらぬ、心の闇よ薄き吾が肌。

スクリーンに映る歌。〜　身を重ね、抱（いだ）きてもなお交わらぬ、心の闇よ薄き吾が肌。

座席につく晶子。向かい側に座っている例の男。

男　ひどい話だなー。だってあなたは両親の反対を押し切って堺の家を出て来たんでしょう。

晶子　女三界に家無しです。

男　それは別の意味でしょう。欲と色と美の形を更に追う無色界のどこにも人間の姿があってはいけないと仏法の教えです。

晶子　でも、女は親に従い、嫁に行っては夫に従い、子をなしては子

に従いと、結局この世界の何処にも行き場所がないということ
ではありませんか。

男　そんな風に思いますか？

晶子　いいえ、そうはなりません。ならない為に堺の家を出て来たの
ですから。

男　実は晶子さん僕はスパイなんです。

晶子　もう、あなたのそういうお話は沢山です。

男　いや、ほんとです。スパイというよりこれからスパイになろう
としているのです。

晶子　聴きましょう、貴方のその嘘で固めた架空の話を。

男　こんどこそ本当の話なんです。

晶子　いいですよ。どうぞ。

男　実は僕は今本当に迷ってるんです。

晶子　一度決めたスパイの道に？　何を迷うんですの？

男　地図ですよ。

晶子　地図？

男　そうです。地図を造る事はどんな意味を持つのか？

晶子　おっしゃる意味が分かりません。

男　今日本の領土である、かって中国の遼東半島をめぐっ
てきな臭い空気が流れているのをご存じですか？

晶子　さあ、あまりそういう事には疎くって。

男　現在日本は狭い国土を何とかしようと考えて居ます。

晶子　はい、それで。

男　広大な中国に日本が進出していく為には地図が必要なんです。

晶子　地図。

男　その地図を私が造らなければなりません。

晶子　何の為に。

男　そう、正にそのことです。何のために地図が必要なのか？

晶子　あなたのお話しは何処まで行っても分かりません。

男　あゝやっぱりね。私は中々人に分かられない人間なんです。おまけに、自分で自分の事も分からないと来ている。

晶子　お勧めします。もっと分かり易く生きたら。

男　そうですね。あなたの歌のように。

晶子　それは違います。私は分かり易い歌を目指してはおりません。

男　ほう、ではどんな歌を？

晶子　一言では言えません。でも？

男　でも？

晶子　多分心の底に眠っている硬い塊。その塊をそっと外にだして、柔らかく、激しくその糸を解いてやりたいのです。

男　なるほど。それは素晴らしい。いや、だからすばらしいんだあ

なたの歌は・・・・

晶子　ありがとうございます。今のあなたのお言葉だけは信じるわ。

音楽　暗転。

第九場

雲でてくる。光の輪の中。

雲　さて、粟島狭衣（さきごろも）の家に厄介になっていた晶子は、数日後同じ渋谷の与謝野鉄寛の家に、やっと荷物を解く事に成りました。妻の滝野が山口に帰ったからです。

渋谷といっても、ハロウインの渋谷とは大違いですよ。道玄坂を上がると畑があり、ポツンと住宅がまばらに建っているそんな場所を想像してください。

与謝野鉄幹、晶子のトランクと風呂敷を抱えて玄関から入る。

鉄幹　さあ、そこです、どうぞ。狭い処だが、くつろいでほしい。

婆やすみ（不意に出てくる）あらっ？どなたですの？

鉄幹　あゝこちらは以前からこの家にいるばあやだ。

婆や　河本すみです。どちらさまで？

鉄幹　鳳晶子さんと言ってね、歌の勉強に大阪から上京してこられた。

これからは　晶子さんとお呼びしなさい。

晶子　鳳晶子と申します。宜しくお願い致します。

婆や　ほう！で、何時までいらっしゃるんですの？

鉄幹　いつまでって当分だよ、当分逗留することになる。

婆や　そうですか？　奥様がお帰りになるまでですか？

鉄幹　いや、そのそういう事はどうでもよろしい。それよりお茶でもおだしして。

婆や　はい、お茶を出すのはわたしの仕事ですから？。　でも奥様にはなんとお伝えしましょう。

鉄幹　何も伝えんでいい！

婆や　何もそんなに怒らいでも・・・（ト奥へ行く）

鉄幹　すまん。気を悪くせんでくれ。もともと妻の滝野につかえていた婆やなんだ。

晶子　構いませんが、何故奥様と一緒に帰らなかったのですか？

鉄幹　すみが、婆やがどうしてもここに残るというから。

晶子　で？　奥様の滝野さんはすぐ帰っていらっしゃるのですか？

鉄幹　それはそのう・・・・

晶子　おい、鉄幹！いい加減にしろ！

鉄幹　君？　晶子さん。

晶子　私をここまで来させたのはどなたですか！

鉄幹　それは、勿論私です。

晶子　でしたらちゃんと受け止めてください。

でなければ私は行くあてのない、放浪者になってしまいます。

ただの放浪者に・・・・（ト泣き崩れる）

婆や　（お茶を盆の上に持って来る）あら、また女泣かして。

鉄幹　違う。違うんだすみ。

晶子　違いません。

鉄幹　あゝ、・・・・

婆やの持ってきたお茶を、いきなり飲んでごまかそうとする

がむせてしまう鉄幹。

鉄幹　むふ！

婆や　旦那さん。いい加減にしてください。

この時玄関に人がやってくる。増田雅子（二十一歳）。

雅子　御免下さい。

鉄幹　婆や誰かお客様です。

婆や　はい、少々お待ちください。

婆や玄関へ。

雅子　増田雅子と申します。

婆や　はい、ご用件は？

雅子　与謝野鉄幹先生は御在宅でしょうか。

婆や　はい、いらっしゃいますが、今取り込んでいて、どのようなご用件でしょうか。御用の向きが分かりますれば、私がお取次ぎ致しますが。

雅子　あのう・・・・出来れば直接先生にお話しを。

婆や　ですから、ただ今大変取り込んでいまして。

鉄幹やってくる。

鉄幹　どうしたんだ婆やどなた？　あっ？　増田さん。

雅子　先生！

鉄幹　あゝ増田君、君上京してきたのか？

雅子　はい、先生のお手紙を読みましてご相談に。

晶子　（やって来て）上がって頂いたら、先生。

鉄幹　いや、ちょっと複雑な事情がおありの様だから、私が外へ行こう、外で話しましょう。

晶子　それには及びません。さ、どうぞ奥の方へ。

雅子　あのう・・・・わたくし。

婆や　おあがりなさい。上がってお話ししたら。毒をもって毒を制すじゃなかった。毒を食らわば皿までも・・・・

鉄幹　婆や、何を言ってるんだ！

婆や　いや、何も申していません。年寄りは独り言が多くなって・・・・すみません。

晶子　さ、どうぞ。

雅子　失礼します。

雅子上がる。晶子、鉄幹も奥へ。

雅子　改めてご挨拶申し上げます。先生の発行なさっている雑誌「明星」の同人増田雅子でございます。

晶子　あゝ、貴女が増田さん。わたくし鳳晶子と申します。

雅子　では、あの鳳晶子様ですか。

晶子　はい、あの鳳晶子でございます。で、本日は何か？

鉄幹　いや、相談でしょ。相談に増田さんは・・・・

晶子　わざわざ上京なさったとか？ お手紙ではすみませんでしたの？ どちらから？

雅子　福井です。

晶子　福井。

鉄幹　いやだから、ついででしょ、何かの法事とかなんかのついで・・・・

雅子　はい、ついでございます。

晶子　で、ご用向きはどんな。

鉄幹　いや、増田さんが、歌を本格的に勉強したいとおっしゃるので、それだったら、東京へ来て、例えば日本女子大の生徒かなんかになって、その歌の勉強を本格的に・・・・

晶子　先生。わたくしは増田さんにお聞きしているんですの。

婆や（お茶を運んできて）　そうですよ。増田さんから聞かないと。

鉄幹　婆や。（トたしなめ）あのねー、わたしは　要約したんです。増田さんのお気持ちを。

晶子　先生は増田さんのお気持ちを要約出来るような御関係ですの？

鉄幹　いや、喋ることが苦手だから増田さんは。そうでしょ。だから・・・・

晶子　私は今度は先生にお聞きしてるんです。

鉄幹　だから・・・・

雅子　その学校への入学の事でご相談に参ったのです。

晶子　先生に入学をどうこうするというお力はございませんよ。

雅子　分かっております。でも色々と不安がありましたので。

晶子　いずれにせよ。まず、日本女子大を受験して 合格してそれからでしょ。もし色々と御相談があるとしても。

雅子　それはそうですが・・・・

鉄幹　そんな杓子定規に言わなくても、ねえ。色々と不安があるでしょう。だから・・・・

晶子　お優しいこと先生は・・・・・いや！

鉄幹　どうしたんですか？

晶子　先生とこういうお話しをしていると、私は益々嫌な女になってしまいます。

鉄幹　晶子さん。

婆や　分かるわ・・・・

晶子　増田さん。

雅子　はい。

晶子　私は先日大阪の堺から家を出て参りました。そしてこの鉄幹先生のお宅に住むことになりました。わかりますね。増田さんその意味が。

雅子　そうなのですか。私帰ります。（ト立ち上がり帰る）

鉄幹　増田さん。雅子さん。

増田は去る。

婆や　どうなさるんですか、旦那様。

鉄幹　どうすると言って・・・

晶子　先生が優しいことは承知していましたけれど、どなたにもいいえ、どんな女の方にもお優しいのですね。

鉄幹　いや、そのだから、雑誌の責任者としては、色々の のらなくてもよい相談にも乗らなければならず、全くもって・・・そうだ！

晶子　どうなさいました？

鉄幹　歌集を出せばよい。

晶子　歌集？

鉄幹　晶子、君と先程の増田雅子君と、場合によっては、ほら、小浜へ帰って結婚した山川登美子君。そうか、３人の歌集を一緒にして出版するんだ。どうだこの案は。

晶子　そういう事でしょうか？

婆や　そういう事で片付く問題ではありません！

鉄幹　いやあ、我ながらいい案だ。女流三人衆の歌集だ。なんだ、そうか、そういうことか。思いつかなかった。追いつめられれば、いい考えが浮かぶもんだなーしかし。

晶子　私にはわたくし一人の歌集を出してくださるとおっしゃいましたよね。

鉄幹　言ったかな・・・・

晶子　おっしゃいました。

鉄幹　いや、それは言ったかもしれない。言った言わないではなく、貴女の歌集は出そうと思っている。

晶子　でしたら、お約束して順序に従ってください。

鉄幹　それは勿論。

婆や　お待ちください。

鉄幹　ものには順序じゅんばんというものがあるからして。

婆や　お待ちあれ！

鉄幹　なんだ婆や。

婆や　二人ともう少し現実と言うものをご覧になってください。

鉄幹　現実？

晶子　現実ですの？

婆や　「明星」は今どういう状態なんですか？

鉄幹　どういう状態って、読者の評判はいいし、薄田泣菫先生や森鴎外先生も　励ましの文章をあちこちで書いてくださってもいる。

婆や　そう言う事ではありません。

鉄幹　どういうこと？

婆や　休刊はおろか、もうこれでは廃刊しなければならないのではという経済的な現実です。

鉄幹　それは、色々と手を打っているし。

婆や　奥様の滝野さんの実家から融資をお願いし続け、いえ、まるでむしりとるようにして資金の援助を頼み。

鉄幹　ばあや――

婆や　挙句の果ては、奥様を実家に無理やりお返しになる。そんなことがいつまで通るとお思いですか？

晶子　先生・・・・

鉄幹　婆や 芸術の道は茨だ。二律背反なのだ。

婆や　ニリツハイハン？

鉄幹　この国で本当のいい歌を造ろうとすれば、金はついてこない。ではどうするか。経済の破たんに負けて、歌を止めるか？それでは生きている気がしない。生きている意味がない。悩ましいなー。分かるか婆や。

婆や　わかりません。難しいことは分かりません。ただすみは人の道について申しているのです。

鉄幹　人の道・・・もちろん人の道を外した外道にはなりたくない。

晶子　あのう。

鉄幹　なんですか？

晶子　すみません。せめて私の荷物を解かせていただいて。いいでしょうか。着いたばかりですので。

鉄幹　ああ、そうだった。ごめんなさい晶子さん。それが先だ。それが何よりも。

婆や　旦那さん。外道はいけませんよ。

鉄幹　腐っても鯛、わしは外道にはならん。

風　〜　妻をめとらば、才長けてみめうるわしく情けある。
友を選ばば　書を読みて、六分の侠気、四分の熱。
あゝわれダンテの詩才なく、バイロン、ハイネの熱なきも石を
抱きて野にうたう芭蕉のさびをよろこばず。
与謝野鉄幹「人を戀うる歌」の一説です。

婆や　何が六分の侠気，四分の熱なんだか。

代書屋出てくる

代筆屋　あて先はいつもの山口県徳山の林滝野様だね。

婆や　はい、その通りで。

代筆屋　で、本文は。

婆や　「奥様案の定です。奥様が汽車に乗り、御帰りになられたその
日です。あの女晶子が、」ちょっと待って。汽車に乗りはいい
わ、いらない。

代筆屋　汽車無しね。奥様案の定です。

婆や　あ、奥様もいらない。代筆屋さん値段は字数なんだろう。

代書屋　そうさ、いつも言ってるだろう。

婆や　「案の定です。奥様がお帰りになれたその直後にあの女鳳晶子がお二人の家にやってきました。その後増田という」・・・・その後からあとはいらないわ。

代書屋　・・・・お二人の家にやってきました。　それから。

婆や　そこまでいい。とりあえず。

代書屋　案の定です。奥様がお帰りになったその直後にあの女鳳晶子がお二人の家にやってきました。

婆や　ちょっと待って。「お帰りの直後、鳳晶子が家にきました」でいい。

代書屋　そんな短きゃ、電報でもいいんじゃないか？

婆や　電報は駄目だよ、電報は高くつくから。

第十場

風　さて、この年、１９０１年つまり二十世紀初めの年、明治３４年の日本の風。風向きはどうだったのでしょうか？ 明治維新から３０年以上も経ち、列強諸国に互して、国家を確立しようという動きや、ストライキという言葉の誕生とともに労働階級の意識も変わり、いわば二つに引き裂かれた年でもありました。愛国婦人団体が生まれ、右翼の結社も誕生し、一方、田中正造が天皇に、足尾銅山の鉱毒事件を直訴するという事件も年の暮

れには起こりました。

みだれ髪の本の表紙映る。

〜　その子二十（はたち）、櫛にながるる黒髪の、おごりの春の美しきかな。

風　そんな中八月、与謝野晶子は歌集「みだれ髪」を鉄幹の編集により出版し、それを引き出物のようにして、その秋二人は結婚をしたのでした。

「みだれ髪」は二分された世相そのもののように正に賛否両論でした。

その年の暮れ与謝野鉄幹は四谷愛住町の黒龍会の本部に呼び出されました。

四谷黒龍会本部　内田良平・頭山満・犬養毅・大隈重信　阿部精二。

内田良平　与謝野君、何で君がここへ呼び出されたかわかるかね。

鉄幹　さっぱりわかりませんな。

犬養毅　与謝野晶子さんの書いた「みだれ髪」が評判を呼んでいるそうだね。

鉄幹　おかげさまで。

内田傍らに置いてある「みだれ髪を」取り上げて読む。

内田　〜　細きわがうなじにあまる御手のべて、ささえたまえな帰る夜の神――これはどういう意味かな？

鉄幹　あなたの腕は、私のうなじを抱いても余るので、その腕で帰ろうとする夜の神様をとどめてくださいな。といったような・・・・

内田　さっぱりわからん。もっと分かり易く。

鉄幹　もっとあなたとこうしていましょう。という歌です。

内田　だから、もっとどうしていようと言ってるんだ。女か女が言ってるんだな。

鉄幹　分かりますでしょう。その恋の歌ですから。

内田　だから分からんのだ。

大隈　内田君、良平君。そんな風に言ってしまったら。

内田　大隈先生、失礼しました。私がひっかかるのはこの夜の神様というくだりです。神は夜であれ昼であれ、私にとっては陛下だけであります。

頭山満　まあ、分からんでもないが、そこを議論してもしょうがない。既に世に出た物は。

内田　はい。ですが、頭山さん。ここが私の原点でここをきちっと伝えておかないと。

頭山　それはわかる。それに吉野君も我々がどういう集まりかは分かって来られておるのだろう。

鉄幹　与謝野鉄幹です。頭山満さん。

頭山　あゝ、失礼与謝野君だった。知ってるよ君の「人を戀する歌」

鉄幹　それも「人を戀うる歌」です。

頭山　あゝ、失礼した。苦手でな、恋は（笑う）

阿部精二　先生そろそろ本題に。（ト犬養を促す）

犬養毅　そうだ。どうだろう。与謝野鉄幹さん。

あなたの歌だ。〜　妻をめとらば才長けて、みめうるわしく、なさけありのあの歌。

阿部　あの歌を、戦意高揚と、世のますらおぶりに結び付けて、特別にもっと広く世間に広げたいと、犬養先生はおっしゃっているのですが。

鉄幹　しかしあの歌の意図はそういう処にはありません。

大隈　どういう意図なんですか？

鉄幹　特に世の中をどうしょうとか、世の人々を鼓舞しようと思って作ったわけでは。

内田　雑誌「明星」は今大変なんでしょう。

鉄幹　大変とはどういう意味で。

内田　赤字ですよ。休刊の瀬戸際にあるとか聞きましたよ。

鉄幹　まあ、それは正直大変です。

頭山　何とかしようじゃないか与謝野君。

鉄幹　いや、結構です。

内田　えっ、断るんですか？

鉄幹　特定の団体とか 主張を持っていらっしゃる所からの融資は お断りしています。

犬養　ほう、強気だね。与謝野さん。

鉄幹　そこだけは強気です。「明星」は 自由で闊達な歌と文章表現の場所で有りたいとねがっています。そこだけが私の最後の砦ですので。

頭山　わかった。

大隈　いいんじゃないか？ 私はいいと思う。

犬養　そう、私もそういう本があっていいと思います。

内田　大隈さん、犬養さんいいんですか、本当に。

頭山　いいだろう。

内田　私はちょっと、いや大分ひっかかる。我が国が一致団結していこうという時に軟弱な色恋や男女のみだらな関係を歌った本があっていいのか。いや、あるべきではないと。

鉄幹　私はそうは思わない。

内田　なに？

鉄幹　５千万人の人間がいれば五千通りの考えがあり、その数だけの暮らしがある。それを考えるのがあなた方の仕事でしょう。それを何もかも一つにという乱暴な考えや方法論があっては断じてならない。

内田　おい、貴様！

内田がなぐりかかろうとして、阿部が止める。

頭山　やめろ内田！

鉄幹　浪漫主義は、まず自由であることを前提に何かを語り、何かを歌う事であります。それ以上でも以下でもありません。失礼します。

鉄幹は出ていく。

内田　ああいう輩がいるからいつまでたっても日本は一等国にはなれん。

大隈　いや、そうとも言えんだろう。あいつはどうして、中々の侍だ。

内田　竹光を腰に差した侍ですか？

頭山　いや内田、奴は本物の刀を差している。やがて、お前にも分かるだろう。

犬養　頭柔らかく、魂は堅くか？　我々もちと学ばねばならんな。

第十一場

再びシベリア鉄道の車内。男と晶子

男　あの時の与謝野鉄幹さんは立派でした。

晶子　えっあなたはその時事務所にいらっしゃったのですか。

男　はい、いたんです。私は犬養毅先生の書生です。

晶子　また新しい嘘を。何処を信じたらいいんですの？

男　これは本当です。私は今、一つの役目をおおせつかり、その前に一年かけて、世界を巡っています。

晶子　詐欺師でスパイのあなたが？

男　すみません。詐欺師でもスパイでもありません。でももし、あらかじめ進出しようという土地の地図を造るのがスパイなら、私はスパイかも知れない。

晶子　そうですか？　鉄幹とお会いになった。

男　一瞬ですよ、会ったのは。でも立場は違え本当に立派な志のある方とお見受けしました。

晶子　そんなことがあったんですね。初めて聞く話です。

男　晶子さんはご存じなかったのですか？

晶子　知りませんでした。でも「明星」は本当に大変でした。四年前に休刊になってしまいましたが、支援して下さる方がいたらど

んなに助かったことでしょう。

男　そんなに逼迫していたんですか？

晶子　でも、鉄幹はそういう人です。簡単に心は売らないのです。

男　心を売るか？

晶子　あなた・・・・

男　何でしょう。

晶子　失礼ですが、あまり、初対面の人としゃべるのは苦手でしょう。

男　どうしてそれを。

晶子　わかりますわ、それくらい。わざとですね。

男　えっ？

晶子　わざと私に話しかけてきた。何故ですか？

男　修行の一環と言われました。

晶子　犬養毅さんに。

男　そうです。

晶子　まあ、犬養さんも随分と不似合いな方に似合わない事を押し付ける方なんですね。

男　人は変われると、いや変わらなければならないといつも言われています。

晶子　変わるのが幸せなのか変わらないのが幸せなのか・・・わかりません。

音楽

僕出てくる。膝を抱えている。

僕　僕は変わらない。変わることはできない。だって塊なんだから。
塊は変われないんだ。

母出てくる。

母　いつまで、そこにいるの？

僕　ごめんなさい。

母　謝るのはもういいの。何時までそこにいるのかって聞いている
んだよ。

僕　ずっとだよ。だって僕動けないんだ。

母　何で？

僕　僕、塊なんだ。塊になってしまったんだもん。

母　塊だって？

僕　塊は動けないんだ。

母　何を言ってるのこの子は？

僕　塊は変われないんだよ。

母　だったらいつまでも固まっていたらいいだろう。

僕　ごめんなさい。許してください。

母　いくら最初に覚えた言葉がごめんなさいだって、そう簡単には許さないんだよ。大人には大人の事情ってものがあるんだから。

僕　変われないんだ塊は　・・・

僕と母は消える。　山川登美子光の輪の中に出てくる。

登美子　私は変わりました。いいえ、変わろうと努力したんです。そのため、遠縁の駐七郎（とめしちろう）と結婚しました。

〜　狂へりや世ぞうらめしきのろわしき、髪ときさばき風に向かわん。

私の決意の歌です。でもずるーい。晶子さんはずるい人です。

鉄幹さんの処へ押しかけて行くだなんて。

あの日の事は忘れません。送られてきた「明星」十三号の社告の終りに記されていた一行「鳳晶子氏留学の為上京せられ候」

そして晶子さんの「みだれ髪」出版の予告。私はどれだけ打ちのめされたことか・・・

第十二場

登美子歩き出し、与謝野家の玄関に向かう。

登美子　御免下さい。

晶子　はい(奥から)どちらさま?

登美子　わたくしです。

晶子　私って・・・・あ、登美子さん。

登美子　お姉さま。おひさしうございます。

晶子　久しぶりね。その折は本当にご愁傷様でした。

旦那様が亡くなられてさぞ、気をお落としになりましたでしょ。

登美子　いいえ、悔いはありません。妻としては充分仕えましたから。

晶子　でも・・・・

登美子　あのう、先生は?

晶子　あゝ、そうでした。(奥へ)あなた、山川さんよ。山川登美子さん。

鉄幹　なんだって?(現れて)あゝ登美子さん。

登美子　先生、御久し振りでございます。

鉄幹　どうしていました、あれから。

晶子　お茶を入れて参ります。

ト奥へ行く晶子。

登美子　先生!

鉄幹　　登美子さん。

二人はひしと抱き合う。

登美子　お逢いしとうございました。

鉄幹　　私もだ。君の事は一日たりとも忘れたことはない。

登美子　本当ですか？

鉄幹　　嘘ではない。

登美子　わたくしも、先生と会える日の事ばかりがのぞみで・・・ここまで何とか生きてきました。

晶子お茶をもって入ってくる。

二人は気配を感じてさっと離れる。

晶子　　ごめんなさい。すこし、熱いかもしれません。さましてから召し上がりになったら。

登美子　はい。大丈夫です。お茶は熱い方が好きですので。

登美子お茶を飲む。かなり熱い、熱いが言った以上登美子は、我慢して飲み干す。

登美子　あのう、失礼ですが、おめでたですの？

晶子　分かる？　わかるかしらね二番目の子供を授かったの？

登美子　それはおめでとうございます。

晶子　ありがとうございます。あなたご病気は。

登美子　ええ、何とか大丈夫です。

鉄幹　どこか悪いのですか？

晶子　あなた、おとぼけがうまいこと、知っているくせに。

鉄幹　いや、なんとなくそのう。

晶子　肺結核ですか？　ご主人の御病気がそのまま御移りになったのね。

登美子　はあ・・・

晶子　あまり出歩いたりしない方がいいわね。

登美子　はい。

晶子　どこか、良い療養所はないのかしら？　嫁ぎ先とは縁が切れましたの？

登美子　ええ、なんとなく・・・・

晶子　でも、あなたは御実家が大層な資産家だから、なんとかしていただけばよろしいのに。

登美子　無理を言って日本女子大に入れてもらいましたので、それ以上は・・・・

この時一人の男が現れる。後の石川啄木（１６才）である。

石川　ごめんください。

晶子　はい。どなた？（迎えに行く）

石川　あッ石川です。先生は御在宅ですか。

晶子　石川さん。さ、どうぞ。今お客様がいらしてて。

石川　では、又出直してきます。

鉄幹　かまわん。石川君。上がりなさい。

石川　よろしいんですか？

晶子　いいのよ、どうぞ。

石川　失礼します。ありがとうございます。

石川、晶子に案内され茶の間へ。

鉄幹　紹介しよう。石川君と言って岩手県の出身の青年でね。

こちらは、歌人の山川登美子さんだ。

石川　これはこれははじめまして、歌は「明星」で拝見していました。

登美子　暫く投稿していませんのよ。

石川　〽　うらみ多きこの行く秋を如何にせむ、やらじ放たじ血をみ

せたまへ。ですよね。

登美子　よく覚えておいでですのね。主人が亡くなった時歌った歌です。

晶子　怖いように激しい歌ですわね。

登美子　そうですか？

鉄幹　石川君、今日は何か？

石川　いえ、ぶらっと寄らせていただいただけです。

鉄幹　何か相談でも。

石川　相談というほどの事でもありません。お邪魔でしたら。

晶子　いいのよ。そうだ。あっちの部屋へ参りましょう。私がお相手するわ。このお二人は積もる話があるようなので。

石川　はあ・・・

晶子　さあ、どうぞ。（ト石川を促す）

石川　はい、それではお言葉に従って。

晶子と石川別の部屋、空間へ移動する。

登美子　順調ですのね。

鉄幹　順調とんでもない。「明星」は燃え尽きそうだ。火を噴いて。経済的にも、離反者が大勢出るし。

登美子　ご家庭の事です。

鉄幹　家庭？　いや、とっくに破たんしているよ。

登美子　破たんされているのですか？　破たんされていてもお子さんは順調にお生まれになるのですね。

鉄幹　いや、それはそのう・・・・

別の空間。晶子と石川。

晶子　何かあったの？

石川　いいえ、本当になんにもありません。というか、晶子さんや鉄幹先生、明星の同人の歌を詠んでいると、どんどん自信を喪失して来るんです。

晶子　どうして？

石川　歌を歌う事の根拠と言うか塊。

晶子　塊？

石川　僕にはなんというかそのう劣等感しかないんです。そんなものは歌の根拠にはならない。

晶子　劣等感いいじゃないの？

石川　劣等感、人に負けたという思い。のけ者にされているという意識、そんな下らない暗い気持ちだけが切りもなく出てくる。

晶子　それをバネにしたら。

石川　バネになりますかね、そんなものは。

鉄幹と登美子。

鉄幹　そうだ、歌集をだそう。君と晶子と増田雅子君との三人の歌集だ。

登美子　「嫉妬」という題にしますか？

鉄幹　嫉妬？まあ、そういう生々しいのではなくて。

登美子　生々しいですかやはり。

鉄幹　嫉妬は生々しいだろう。

登美子　嫉妬の往きつく先は何処なんでしょう。地獄ですか？

鉄幹　「恋衣」はどうだろう。恋の衣だ。上品で美しいだろう。三人の歌集としてはいいセンスだろう。

登美子　「恋衣」ですか？

遠雷聞こえている。晶子と石川。

晶子　あなたはいいわ、盛岡というふるさとが有るじゃないの。

石川　石をもて、追われるごとくですよ。カンニングで盛岡中学を除籍になったんです。

晶子　あなたは、故里を追われた。私は故郷を捨てた。さあ、歌になるのはどっち。

石川　それは・・・・

晶子　捨てた人間には悔恨しか残らないわ。追われた人間には悔いること以上に、激しく復讐したいという意思がある。

石川　復讐ですか？

晶子　そう、恨みつらみ、そしてそれを投げかけるふるさと。
これ以上絶好の歌の素材はないでしょう。後はあなただけよ。
あなた次第。

石川　故郷への恨みつらみ・・・・

晶子　捨てた人間にふるさとは歌えない。だから私は、恋を歌うの。
恋に逃げるしかないのよ。

鉄幹と登美子

鉄幹　「恋衣」という歌集を造ろう。「明星」　復活の元になるかもしれん。　いや、きっとなる。

登美子　先生がおっしゃるなら。先生、もう一度抱いて。

鉄幹、登美子を抱く。

晶子と石川

石川　なんかすこしですが、見えてきたような気がします。
ありがとうございました。

晶子　いいえ、鉄幹とお話しできればよかったのにね。

石川　いえ、いいんです。先生にはこんな泣き言は言えませんから。

晶子　そう。

石川　僕、ローマ字で日記を書いてるんです。

晶子　ローマ字で？

石川　ええ、決して他人が読めないような日記です。自分の行動の一番恥ずかしい処をかくさず書いています。

晶子　のぞいてみたいものね。

石川　恥ずかしすぎて歌にも、歌の素材にもなりません。

晶子　そうなんですの？

石川　では、これで失礼します。

晶子　あ、雨が降りそうですよ。傘を。

石川　大丈夫です。濡れて走って行っても、同情されるような年じゃあ、有りませんから。

晶子　まあ、若いって言いたいの？　どうせこっちはおばさんですよ。

石川　そんなんじゃありません。では失礼。（石川去る。）

石川を見送る晶子。振り向く視線の先に、抱き合っている二人。

稲妻、雷鳴、近くに落雷

晶子二人の間に入り、鉄幹と登美子をそれぞれ平手うち。

晶子　何で、何故こんなところで。ここはわたしの家ですよ。

（泣き崩れる）

第十三場

音楽、天の声聞こえる。

天の声　おい、晶子、与謝野晶子。

晶子不意に立ち上がりあたりを 仰ぐ。

天の声　お前だよ、そこの塊。

晶子　わたくしですか？（まだ半信半疑）

天の声　そうだ、与謝野晶子と呼ばれし物。

晶子　はい。

天の声　暴力はいかん。

晶子　暴力？ 今のはささやかな、ぎりぎりの私の抵抗です。

天の声　抵抗か？ 抵抗はしなやかにしたたかにやることだ。

晶子　どうやって？

天の声　言葉を使う物が一番粗悪な体力に頼ってはいかん。

晶子　言葉の限界を超えました。

天の声　言葉に限界はない。

晶子　では、どうすればいいのですか？

風、下手にでてくる。

風　弁護人の風です。弁護させてください。

天の声　弁護だとこれは裁判か？

風　被告人晶子は、与謝野鉄寛の女性への異常なほどの移り気、いいえ、同時進行の愛に悩まされてきました。最初の妻、浅田信子（さだこ）にはじまり、林滝野、山川登美子、増田雅子、玉野花子等数々との女性を、ある者はヒモのように金を巻き上げ、ある者は師匠と弟子というパワーハラスメントを利用し・・・

天の声　ちょっと待て！聞いていないぞこれは裁判か？裁判が始まったのか？

被告人席の柵、又は机が使用面に持ち込まれる。

雲　検察官の雲です。裁判長。休憩は終りました。

天の声　休憩が終わった？よし、やって見よう。

被告人、宣誓はしたか？

晶子　宣誓はしていません。誓う相手がいないのですから。

神も信じなければ、己の良心にも誓えませんから。

天の声　よし、分かった。宣誓なしでいくか？

雲　ちょっとまってください。宣誓無いんですか？

天の声　先生だらけだ。与謝野鉄寛先生、晶子先生、犬養先生、大隈先生。これだけ先生が溢れていればセンセイはいらんだろう。

雲　おい、そんなでいいの？　何これ？

天の声　被告人晶子。

晶子　はい。

天の声　泣きたいか？　苦しいか？　殴っても気が晴れないか？

晶子　はい。

天の声　だが、選んだのはお前だ。

晶子　わたくしです。わたくしが何もかも捨てて、選びました。

天の声　だったら、罪は選んだお前に有る。

風　ですが、選ばせるように仕向けたのは鉄幹です。

天の声　鉄幹、被告人の席に。

鉄幹　私が？

天の声　いいから席に。

鉄幹、被告人席に行き晶子と入れ替わる。

天の声　晶子がお前を選ばせるように仕向けたのか？

鉄幹　いいえ、私は何も仕向けてはいません。晶子が、「明星」の同人として投稿してきて、才能が有ったので、会おうという事になり・・・・

天の声　なりゆきはどうでもいい。お客さんがもう十分に知っている。
仕向けたのかそうではないのか？
鉄幹　仕向けたと言えば・・・いいや、違うな、相思相愛。
天の声　どうでもいい。して、別れるのか
鉄幹　とんでもありません。別れるなんて。
天の声　晶子。
晶子　はい。
天の声　お前はどうなんだ。
晶子　別れません。
天の声　では、両者別れない。以上。本日の裁判おわり。あー疲れた。
風呂に入って、冷酒でも飲むか・・・・
雲　おい、ちょっと待て、何だこれは？これが裁判か？
風　そのようね。
雲　こんな馬鹿な？

晶子静かにシベリア鉄道の座席に戻る。

第十四場

走り続けるシベリア鉄道。
男、晶子の席に近づいてくる。晶子目を閉じている。
男ややあって、声を掛ける。

男　お休みでした？
晶子　あゝ阿部さん。
男　すごい稲妻でしたねー。
晶子　稲妻、あゝ私眠っていました。
男　えっ眠っていたんですか？
晶子　夢の中で、雷が落ちて、裁判をやっていました。
男　裁判？　ほう？　何の、とお聞きしたいところですが、私はそろそろ降りなければなりません。
晶子　もうどのあたりですの？
男　モスクワです。あなたも乗り換えでしょう？
晶子　はい、乗り換えてパリまで行きます。
男　色々と楽しいお話をありがとうございました。
晶子　こちらこそ、沢山ごちそうになったり、楽しい一時を。頑張ってください。頑張って何かあなたが納得の行く生き方を。
男　探します。必ず納得の行く生き方を。さようなら。
晶子　待って。
男　はい。なんですか？
晶子　あなたを日本で待っている方はいるんですの？
男　はい、妻が私の帰りをずっと待っています。
晶子　良かった。お幸せに、詐欺師さん。
男　晶子さん。あなたもお幸せに。スパイです。

晶子　さようなら。ただの阿部さん。

音楽、風が出てくる。

風　明治４２年、１９０９年三月、晶子に三男麟が生まれました。翌月、四月のことです。山川登美子は肺結核で病の床にありました。

病室。登美子寝ている。鉄幹病室にやってくる。

鉄幹　登美子・・・・

登美子　（気づいて、起き上がる）先生。

鉄幹　あ、寝たままでいい。どうだい。

登美子　駄目です。

鉄幹　弱気は駄目だよ。病は気からって言うし・・・

登美子　（せき込む、鉄幹が背中をさする）

鉄幹　寝てなさい。

登美子　いえ、いいんです。だって・・・

鉄幹　だって？

登美子　これが最後かもしれないのに、下からあなたのお顔を仰ぎたくはないわ。

鉄幹　登美子。大丈夫君は治るさ。

登美子　いいえ、私には分かるの。もうすぐなの。

鉄幹　そうさ、すぐなおる。

登美子　もうすぐ、あの空から、お迎えが来るのよ。

鉄幹　そんなことはさせない。そんな理不尽な事は。

登美子　（ややせき込み、持ち直して）先生？

鉄幹　なんだい。

登美子　もう一度生まれ変わったら・・・

鉄幹　登美子・・・

登美子　結婚してくださる、登美子と。

鉄幹　ああ、一緒になろう。きっと。

登美子　嬉しい寛、うれしい・・・

鉄幹　（さらに抱きしめて）お前は・・・

登美子は倒れる

鉄幹　登美子、登美子・・・

暫く前より、晶子その様子をうかがっているが、涙をぬぐう。

暗転　風が再びでてくる。

風　山川登美子享年二十九歳九カ月の短い命でした。

さて、わたくしという風に乗って、汽車はシベリア鉄道を更にひた走っています。ここで、時をほんの少し遡（さかのぼ）ることにします。

砲撃の音かすかに聞こえてくる。（女1、女2入る）

風　明治37年、1904年、日露戦争が始まった年、9月号の「明星」に次のような詩が載りました。たかが一冊の雑誌と思わないでください。想像してください。　この頃のネットワークといえば、家庭にラジオもテレビもなく、映画も日本では上映が始まった頃で、もっぱら新聞と雑誌そして手紙、口コミという噂話が、受け取る情報の全てという時代です。与謝野晶子の詩です。

女1出てくる。音楽。

風　君死に給うことなかれ
旅順口包圍軍の中に在る弟を嘆きて

女1　〜　ああ、おとうとよ、君を泣く、

君死にたまふことなかれ、末に生まれし君なれば、
親の情けはまさりしも、親は刃(やいば)をにぎらせて
人を殺せとおしえしや　人を殺して死ねよと
て二十四までをそだてしや

女2出てくる。

女2　君死にたまふことなかれ、すめらみことは戦ひに
おおみずからは出まさね　かたみに人の血を流し、
獣の道に死ねよとは、死ぬるを人のほまれとは、
大みこころのふかければ、元よりいかで思(おぼ)されむ

頭山満出てくる。

頭山　そこだ。何でわれわれ国民がおおみこころを計るのか、おおみこころのお心を推測するのか！断じてそんなことがあってはならん。不敬罪で有るぞ！この歌不敬罪なり！よってわしは与謝野晶子に三年以上五年以下の懲役を要求する。

石川啄木出てくる。

石川　〜　不来方（ふきかた）のお城の草に寝ころびて、空に吸われし十五のこころ

晶子さん。僕はあなたの弟では ありません。弟もどきにもなれません。戦争へも行きません。それでもなお、貴女の弟で有りたいと思っています。

私は死にません！

与謝野鉄幹さん。晶子さん。ようやく肚が定まりました。

天の声　お前は誰だ？

石川　石川啄木です。

風が出てくる。音楽。エッフェル塔が映る

風　晶子はこの硬い時代の土の上を、裸足で歩いていたのです。そんな晶子の五月、シベリア鉄道二週間の長い旅が終わりました。

晶子はやっとの思いでパリに着きました。

ベル・エポック、この時パリはヨーロッパ文化の中心で、華やかで、かわいい或いはかっこいい風が吹いていました。

人は時として、夢と幻想や妄想の中で漂っている方が幸せという事があります。

蓋をあけた現実がやっかいで、めんどうで、引き籠ってしまいたい。そんな時が少なくありません。

パンドラの箱はやはり開けないに限るようです。

第十五場

１９１２年明治４５年巴里駅構内。

ふろしきを抱えて立っている晶子。鉄幹やってくる。

鉄幹　あゝ晶子。

晶子　寛さん。

鉄幹　よく来たな。大丈夫か？

晶子　お元気でした？

鉄幹　元気だ。ようやくパリにも慣れた。さあ疲れたろう。

近くに控えていた、館野すず（２４歳）出てくる。

すず　お疲れでしょう晶子さん。お荷物を。（ト受け取る）

晶子　この方は？

鉄幹　あゝ館野すずさんと言って、身の回りの世話をしていただいている。

すず　すずです。よろしくおねがいいたします。

晶子　お世話と言って、そんなお女中を雇うほど・・・・

鉄幹　いや、女中ではない。御厚意で。

晶子　ご厚意。

鉄幹　館野さんのお父上は、こちらの日本公使館の職員の方で、「明星」の支援者の方だ。

すず　先生には、私も歌の勉強をさせていただいます。

晶子　そういうことですの。でしたらわざわざこんな遠くまで借金までして私が来る必要もなかったみたいですね。

鉄幹　そんなことはないだろう。さ、疲れてるんだお前は、アパートで、やすみなさい。

晶子　はい。分かりました。やっとです。やっとお会いできました。

鉄幹　そうさ、会いたかったよ。本当に。子供達はどうしてる。

晶子　皆元気です。でも宇智子はまだ生まれて三か月なので一番心配です。

鉄幹　そうか、かわいいか？

晶子　かわいいですよ。写真を持ってきました。

鉄幹　写真。よく思いついたな。

晶子　それは考えますわ。何とかしてあなたにお見せしようと。でも、後ですよ。荷物のずっと奥にありますから。

鉄幹　よし、じやあ、行こう。

すず　では、まいりましょう。

歩き出す3人。風が出てくる。

風　さて、世界は、第一次世界大戦の前で、エコールドパリという、画家たちを初めとする芸術の風が、吹き始めた頃です。マリー・ローランサン。ユトリロ。モジリアニ、その他大勢の画家がモンマルトルやモンパルナスに集まって来ました。そう藤田嗣治ことレオナルド・フジタ もこの一年後にパリにやってきます。そしてベル・エポック、巴里は 美しく可愛い、かっこいい 時が始まる予感に満ち溢れていました。ベル・エポックいい響きです。後になって今の日本は何と言われるのでしょう。スマホ・エポック？ それともＡＩ・エポック？ 分かりません。ここいる皆さんが、全て風になってしまうまでは・・・・

雨の音。鉄幹の借りている3階のアパートの部屋。狭目のダブルベッドと居間。ノックの音聞こえる。

晶子　はい。どなた？

すず　先生、与謝野先生。

晶子　今開けます。ちょっと待って。

ドアを開ける晶子。ずぶぬれのすず入って来る。

晶子　まあ、館野さん。ずぶぬれじゃあありませんか。

タオルを取ってきて、すずの頭を拭こうとするが、すず自分でタオルを取って軽く拭きすぐ晶子に返す。

すず　先生は、与謝野先生は？

晶子　生憎外出中なんですのよ。

すず　そうですか、では傘を お借りできますか？

晶子　ごめんなさい、傘は一本しかなく、寛が持って出ましたのよ。

すず　そうですか、では帰ります。

晶子　暫くここにいらっしゃれば。雨は止むかもしれないし。

すず　いえ。わたくしは今日はお休みですし、先生のお世話は奥様がなさるから、わたくしはもう、御用済みですし・・・・

晶子　でも歌を習うんでしょ。

すず　いいんです。それほど歌を習いたいとは思っていませんでしたので。

晶子　だったら・・・・いいえ、どうぞおあがり下さい。

すず　いえ、帰ります。

晶子　雨はまだやみませんよ。

すず　いいんです。

晶子　濡れて風邪でも引いたら・・・・

すず　風邪でも引いて肺炎になって死んでしまいたい。

晶子　まあ、どうしたの？

すず　何故ですか？

晶子　なんのこと？

すず　何故与謝野先生は、ご結婚なさっている事、奥様がいらっしゃる事を言わなかったのでしょう。

晶子　それは・・・歌を造ることに、直接関係なかったからでしょう。

すず　そうですか？

晶子　そうだと思います。

すず　それでいいんでしょうか？

晶子　いいか、いけないかはわかりません。でもそういう人なのです。

すず　失礼しました。

晶子　お話しがあるなら、寛が帰るまでお待ちになったら。

すず　いいえ、話はありません。帰ります。

その時鉄幹がドアを開け、帰ってくる。

鉄幹　いやあ、ひどい雨だ。

すず　先生。

鉄幹　あゝすずさん。

すず　さようなら。（出ていく）

晶子　先生。土砂降りですのね。

鉄幹　あゝ、土砂降りだ。

暗転。…雨音

第十六場　パリ、ムーラン・ルージュ（ちなみに８５０席）

雲　この年七月三十日明治天皇が崩御され、元号が明治から大正と変わりました。イギリス・ベルギー・オランダを周遊した与謝野夫婦は再びパリに戻ってきました。

その秋の事です。かねてから交流の有る画家梅原龍三郎とその恋人お葉を誘って、夫妻はムーランルージュへ前衛の踊りを観に行きました。

ムーランルージュのロビー

梅原　とうとう来てしまった。

鉄幹　うかぬ顔だね。

梅原　いやあ、別に国粋主義者ではないが、陛下が崩御なされて間もない時期に、例え海外とはいえ、歌舞音曲のたぐいはどうも気が進まん。

お葉（よう）　梅原さんは真面目なんですよ。

鉄幹　どちらかと言えば国粋主義者かな梅原君は。

梅原　いや、そんなことはないが、なんとなくね。

晶子　お気持ちは分かりますわ。

鉄幹　ほう、君死に給うことなかれで、大分右翼から叩かれたにしては意外な感想だね。

晶子　何度も申したではありませんか？弟や親族に戦争で死んでほしくないというのと、陛下にたてつくのとは違います。

鉄幹　わかってるよ。私も戦争には反対だ。

梅原　勿論私もです。

お葉　結局戦争で傷つくのは私達女と子供ですもの。

晶子　そうなの、本当にそう。

梅原　ところで今日の出し物はなんですか？

鉄幹　今夜の踊り手は日本から単身やって来て、こちらであらたな踊りを極めている方だ。参りましょう。

お葉　たのしみだわ。

音楽。一人の女、前衛ダンス始まる。

ダンスが終わる。

拍手とブラボーの声　灯り変わって先程のロビー

梅原　いやあ、なんとも奇妙な踊りだった。

鉄幹　肉体が何かを語りかけてくる。踊りという概念を超えているかもしれん。

お葉　不思議な踊りですわね。

晶子　すてきでしたわ。パリへ来てからのお知り合いですの。

鉄幹　勿論。知り合いの方のお嬢様だ。

この時その踊り手がやってくる。

沙羅　あら、与謝野先生！

鉄幹　あゝすばらしかった。皆感動しているよ。

沙羅　ありがとうございます。

鉄幹　こちらは画家の梅原龍三郎さん。

梅原　梅原です。

鉄幹　そして、お葉さん。

お葉　お葉です。

晶子　鉄幹の妻の晶子です。

沙羅　沙羅です。

晶子　あの有名な女優のサラ・ベルナールさんからお名前を拝借しましたの？

沙羅　いいえ、平家物語の沙羅双樹の花の色からとりましたの。踊る時の芸名ですわ。

晶子　あゝそうですの？　わたくし今紫式部の「源氏物語」を訳していますの。誰にも分かるような日本語に。

鉄幹　身近に光源氏のような者がいると、訳すのもはかどりますわ。

晶子　晶子、皆さんに分からないような話を・・・・

鉄幹　ちょっとこちらへ。

ト鉄幹の袖を引いて離れた所へ。

鉄幹　なんだ、どうした。

晶子　私達は言葉で歌を紡いでいます。

鉄幹　そうさ。

晶子　言葉で世界に語りかけています。

鉄幹　いわば言葉であなたと結ばれたと思っています。

晶子　その通りだ。

鉄幹　それならなんですか？　あの方は躯ですね。

晶子　躯で何かを語りかけています。いわば私たちとは極北にいる方です。

鉄幹　そう言えばそうかもしれない。

晶子　そんな方とも結ばれるのですか？

鉄幹　何を言う。

晶子　私にはわかります。あなたは必ず、まるで病んだ蝶のように、羽から粉を私にまき散らすのですから。

鉄幹　いやあ、そういう関係ではない。

沙羅近よってくる。

沙羅　晶子さん。あなたの歌は好きです。でも私寛さんも好きです。いえ、好きだったというべきでしょうか？

晶子　はっきりおっしゃいますのね。お若いのに。

沙羅　若いからはっきり言います。恋は軽やかで美しい。空に羽ばたく鳥のように。海に潜る魚のように。

晶子　だからといって。

沙羅　鳥にも魚にもなれないわたし達は歌い、踊りそして人を恋するのです。

晶子　それはわかっても・・・・

沙羅　恋は自由だからこそ、苦しくもあります。あなたに謝ろうとは思いません。でも、後ろめたい気持ちが有ったことは認めます。

晶子　沙羅さん。

沙羅　もう悲しみの波が、のど元まで溢れて何もいえません。

さようなら寛さん。

鉄幹　沙羅さん。

晶子　（鉄幹の腕をものすごい力でねじ上げる。）なにも言うことはないでしょ。

梅原　いやあ、たいした女性だ。ああいう女の人が世の中を変えていくんだろうな。

晶子　いいえ、ああでない女も 変えて行きます。ねえ、お葉さん。

お葉　はい。

この時、一人の男が、晶子に短刀を持ち、襲い掛かる。内田良平であった。

内田　天誅！

晶子　あっ！

お葉　きゃあ！

素早く鉄幹が割って入り、梅原が内田を抑える。

鉄幹　何をする！

梅原　やめろ！

内田　与謝野晶子、陛下に対する不敬罪なるぞ！

戻ってきた沙羅、拳一発とけりを内田の腹に入れ、内田膝 を折る。

沙羅　なんか、忘れ物をしたようなので。

ト沙羅去る。

内田　ううっ！

鉄幹　お前は、内田良平。

内田　黒龍会、内田良平だ。

鉄幹　内田君。なんの因果でこんなパリの果てまで短刀片手にやってきた。しかも晶子一人を刺して何の得が有る。

内田　己の得などない。天下国家の為に生きる。

鉄幹　だったら、間違っている。

梅原　そうだ。女の人に刃物を向けるなど論外だ。

内田　間違ってはいない。陛下に逆らう者は罰せなければならない。

晶子　違う！ 私は戦（いくさ）に行く弟を悲しんだだけなの。何故それが分からないの？

梅原　言っても分からんだろう。

内田　わからん。

鉄幹　いいか、目の前でなく、もっと大きく俯瞰して観ろ。

俺達はなんだ。地をはう虫けらにも劣る。歴史の河から見れば

塵芥だ。分かるか内田。

内田　説教は沢山だ。

鉄幹　（内田の頬を張る）聞け！　今貴様は人を殺めようとしたん

だ。話ぐらい聞け。

内田　うう！

鉄幹　何故千年、いや何億年の目で見ない。その目で見れば、歌歌（うたうた）い

も右翼も左翼も、何の考えもなしに死んでいった人間も、みな

同じだ。歴史の塵芥にしかならない。

内田　それがどうした。

鉄幹　それでも、どこかに蟻の足跡ほどの印を残せないかと、人は必

死に生きていくんだ。だが、多分何も残せない。

内田　何が言いたい。

鉄幹　だから、右翼なら右翼らしく、もっと大きな事をやれ！日本を

守りたいか？日本を大きくしたいか？だったら、盗まず殺さ

ずに大きくしてみろ。

内田　そんなことが出来るか？

鉄幹　疑問形を突きつけるのは常に己だ。そして肯定するのも己だ。

心の底に　志（こころざし）　があるなら、　小さくともいい、塊があるなら

やれ、やって見ろ！

その塊の事を魂と呼ぶ。

内田　鉄幹！・・・いや、すまん、しかし、俺は・・・・

梅原　（短刀を渡して）ぶっそうなものはしまえ。

ここだけの事にしてやる。

内田　うう（男泣きしている）・・・

晶子　あなた・・・

暗転

エピローグ

風でてくる。

風　こうして、パリの時間は終りました。やがて、子供達に逢いたくて会いたくてたまらない晶子は、一足先に帰り、与謝野鉄幹こと寛は翌年大正二年、１９１３年1月 に帰国しました。

そして与謝野晶子は生涯に五人の男の子と七人の女の子を産みます。 残念なことに一人生後二日 で亡くしましたが、計十三人の子供達を生み育てたのです。

歌った歌。書いた小説。評論等は数え切れません。

雲出てくる。

雲　俺にも言わせろ。この時代は女性の社会参加は本当に大変な時代でした。そんな時代、女として母として歌人として、作家として考えられない情熱と才能で生きた与謝野晶子。これは驚くべきことです。

風　一つ忘れている。

雲　何を？

風　晶子は妻としても生きたのよ。

雲　そう、妻として。

風　それで、鉄幹は？

雲　鉄幹はこれまでの芝居の通りです。鉄幹は昭和十年１９３５年慶応病院で三月二十六日に肺炎の為亡くなります。六十三歳でした。

風　与謝野晶子は鉄幹に遅れる事七年、昭和十七年１９４２年５月太平洋戦争の最中、六十四歳で生涯を閉じました。

音楽

晶子と鉄幹、出てくる。

晶子　〜　皐月よし、野山の若葉光満ち、末も終わりもなき世の　如

く。

鉄幹　〜　知りがたき、事もおほかた知りつくし、今なにを見る、大空を見る。

雲　そう、大空には何がある。雲だ。雲がぽっかりと浮かんでいる。昔も今もそして未来の空にも。

風　でもわたくしという風がなければ、君達雲は、流れる事も、形さえ変えることも出来ないのよ。分かる？

雲　それはそうだが、だからって・・・　いや、付いて行きます。何億年も。

風　たったの何億年。

雲　いや、未来永劫に。

風　よし、行くよ。空の涯のもうちょっと涯へ。

天の声　高いぞ。遠いんだぞ。とてつもなく。

了（おわり）

参考文献

「君もコクリコわれもコクリコ」　渡辺淳一著　文春文庫
「晶子曼荼羅」　佐藤春夫著　講談社文芸文庫
人と作品「与謝野晶子」　福田清人編　浜名弘子著　清水書院
みだれ髪　与謝野晶子著　角川文庫
新文芸読本　与謝野晶子　河出書房新社